

学徒慰霊碑余話

*

昨年の六月、小学校時代のクラス会が神田で開かれたので、久し振りに顔を出した。無事に六十の坂を越えた元気な顔には、さまざまな人生模様が深く刻まれていた。共に終戦直後の物の無い時代の六年間を支えあつた仲間たちである。焼夷弾が降り注ぐ東京で生まれ、よく生き残つて成長したものだ、空襲のことなど知る由もない。戦時中の話によく両親から聞かされた。東京大空襲のときは「東の空が真っ赤だった。多くの方々が焼死した」というが、東京大空襲とは、戦争とは、学徒出陣とはといわれても、年端の行かぬ子供に分かるう筈もない。成長するにつれて過去に何があつたのかを知るように

益 井 邦 夫

なつたが、実際に学徒出陣のことを意識したのは國學院大學を卒業し、母校に奉職して三年目の昭和四十三年五月一日であつた。國學院大學にとってこの日は、昭和五年に建立した神殿の鎮座記念日で、祭儀が終了したあと、正門近くに建てられた『学徒慰霊之碑』の除幕式が執り行われた。これは靖国神社に合祀されている本学戦没学生四一三名（現在四三九名）の霊を思い出の母校に招き、慰霊をしたいと願う学内外卒業生（院友）多数の要望もあつての建立の実現であつた。山梨県産のさび石を用いた慰霊碑（高さ一九三センチメートル、幅九〇センチメートル）には書家の保多孝三教授が題字を揮毫し、その脇には黒御影石の建碑来歴碑（高さ八〇センチメートル、幅九二センチメートル）も建てられ、そこには折口信夫（おりぐち・しのぶ、釈道空）博士の歌一首と岡

野弘彦助教の亡き友を偲び慰める一文が刻まれた。

人おほくかへらざりけり海やまに みちてきこえし

聲もかそけし

迢空

この学び舎にいそしみし人びとにして 昭和の戦ひの
場にいでゆきて帰らざりしあまたの若き御魂をこゝに
鎮め斎ひまつる いまはみ心もなごみまして静かな
る世の後輩のすがしき学びのさまをみ眼もさやかに見
まもりたまへ

岡野弘彦

折口博士はこの碑のことを知らずに昭和二十八年九月
三日に病没されたが、昭和十八年十月九日、国文学会が
主催した「学徒出陣記念国文学講演会」で金田一京助博
士が「石川啄木」を語り、武田祐吉博士が「門出の歌」
の歴史を説き、そして折口博士が「若き神」と題して現
人神の意義を詳しく講じ、最後に「海行かば」を合唱し
たという。更に十月十四日の軍神祭と壮行会で折口博士
は「学問の道」の詩を紹介した。折口博士は生憎、関西
から北陸に旅行中のため、高崎正秀氏（専門部教授）が
朗読した。その中で折口博士は、

汝（ナ）が千人（チタリ）いくさに起（タ）たば学問
はこゝに靡（スタ）れむ。汝（イマシ）らの千人の一
人ひとりだに生きてしあらば、国学はやがて興らむ。
と語りかけた。「国のために身を捧げてこい」と誰もが

いう中で、千人のうち一人でも生きて還る者があれば、
国学は再び興るであろうから、無駄死にするなど論じた
この詩は、出陣する学生たちに大いなる感動を呼んだ。
しかし心の中で最も願ったであろう養嗣子藤井春洋（は
るみ）教授を硫黄島の激戦で失ってしまった折口博士の
嘆きはいかばかりか察するに余りある。それだけに無念
の思いで綴った、能登羽咋の砂浜に立つ父子の墓の「も
つとも苦しい、かひに最くるしみ死にたるむかしの陸
軍中尉折口春洋ならびに父信夫の墓」の字句が痛痛しく
胸に突き刺さる。

慰霊碑前での慰霊祭は学生有志によって昭和四十六年
から毎年十月十四日に執り行われることになったが、学
徒出陣四十周年に当る昭和五十八年十月十四日と終戦五
十周年を迎えた平成七年十月十四日の慰霊祭は大学と院
友会が共催で執り行った。

学生有志による祭儀は三十回を数え、遺族や卒業生等
関係者も高齢になり、平成七年に戦後五十周年を迎えた
ことなどを理由に、平成十二年を以て終了を宣したが、
関係者の「もうしばらく続けて欲しい」との要望もあつ
て、翌年から内輪な形で継続することになった。その一
方で鈴木正男氏の「是非文集を作りたい」との遺志を継
いで、卒業生や学生有志によって「戦没院友学徒遺稿追

悼集刊行会」が組織され、平成十六年六月二十九日には『國學の子我等往かむ』（展転社）を刊行した。行間からは戦没学徒らの慟哭が聞こえてきそうである。

*

目を学外に転じて他大学を見ると、多くの大学が慰霊碑の建設も祭儀も行っていないようである。先般、大学史研究の一環として戦前からある大学五十五校（女子大学も含む）を抽出して設問した結果である。建立している大学は次の十六校であった。

▽慶應義塾Ⅱ「平和来るの像」昭和三十二年十二月一日、昭和七年卒業生有志建立、「還らざる学友の碑」平成十年十一月七日、大学建立、三田キャンパス▽成蹊大学Ⅱ「慰霊ブロンズ碑」昭和三十九年九月十三日、大学建立▽拓殖大学Ⅱ「拓魂碑」昭和四十三年十一月三日、学友会建立、八王子キャンパス▽東京大学Ⅱ「東京大学戦没同窓生の碑」平成十二年五月二十七日、本郷キャンパス正門前、「東京大学医学部戦没同窓生の碑」平成十三年五月二十七日、同弥生門前、ともに東京大学医学部戦没同窓生追悼基金（東京大学鉄門倶楽部）建立▽東京農業大学Ⅱ「満州湖北農場殉難者の碑」昭和五十二年五月十四日、大学建立▽東北大学Ⅱ「英魂碑」昭和四十二年

五月二十七日、仙台市青葉区星陵町、東北大学医学部長陵同窓会建立▽東洋大学Ⅱ「平和祈念之碑」平成十七年十一月十二日、校友会建立、白山キャンパス▽日本体育大学Ⅱ「戦没者慰霊碑」昭和三十三年四月二十六日、大学建立、深沢校舎▽明治大学Ⅱ「明治大学戦没学徒霊殿」平成十八年十月九日、校友会新潟支部建立、新潟県護国神社境内▽立教学院Ⅱ「立教学院平和祈念の碑」平成十三年十一月一日、碑設置有志の会建立▽早稲田大学Ⅱ「早稲田大学戦没学生之碑」昭和二十二年七月十二日、愛知県豊川海軍工廠跡、「平和祈念碑」平成二年十月二十一日、大隈庭園、ともに大学建立▽関西大学Ⅱ「慰霊碑」昭和五十一年四月七日、千里山キャンパス、有志建立▽関西学院Ⅱ「旌忠（せいちゅう）碑」昭和十五年二月十八日、教職員・学生・生徒同窓建立、「旌忠碑」プレート平成十三年十月三十日、碑検討委員会「プレート起草」委員会設置、西宮キャンパス▽皇學館Ⅱ「神宮皇學館大學戦没学徒顕彰碑」（防人の像）平成十八年二月十一日、法人建立、「六角講堂」跡地▽長崎大学Ⅱ「教育学部」昭和三十四年八月九日、長崎市文教町構内、同窓生建立（原爆犠牲学友五十四名の追悼、「医学部」―初代・昭和二十年十一月、二代目・昭和二十二年十一月十二日、三代目・昭和二十七年十一月、長崎市坂本構内、職員・学生・有

志建立（原爆犠牲の職員・学生等の慰霊）▽立命館Ⅱ「立命館大学戦没学生慰霊碑」（勤労働員）、愛知県豊川海軍工廠跡、建立時期不明、大学建立。

ここに紹介した大学の碑が広く賛同を得て建立されたかという点、そうでもなく、それぞれ複雑な事情を抱えているようである。例えば、東京大学医学部の碑の場合、医学部教授会の賛同が得られないために本郷構内には建てられず、正門向かい側の民有地（文京区本郷五丁目二番）と弥生門向かい側の弥生美術館（文京区弥生二丁目四番）の塀を借用した。正門向かい側の自然石の碑には良寛の「天上大風」の言葉が刻まれ、壁の碑銘には、

東京大学戦没同窓生の碑 昭和六年（一九三二）から昭和二〇年（一九四五）まで十五年（満州事変、日中戦争、太平洋戦争）にわたる戦争で東京大学も多数の戦没者を出したが戦後五〇年のあいだその実数は不明のままであった。このたび大学による学徒出陣の調査が行われ千七百人近い戦没者が明らかになったが、その実数は二千五百人にも達すると推定されている。私たち医学部卒業生有志はこの事実に驚き、悲しみ、世紀が変わる前に追悼の碑を建ててこの事実を後世に伝えるべく追悼基金を組織した。この「東京大学戦没同窓生之碑」は、大学正門前のこの地にお住みの方々から

温かいお心をいただいて建立が可能になり、同窓生あい集って建立するものである。「避けがたい状況下に、愛する人々のために一命を捧げた」若者たちのいたましくも悲しい事実を歴史に刻む碑であって、戦没同窓生への深い思いを「天上大風」という良寛の言葉に託した。今世紀最後の東京大学五月祭初日の今日、ここに同志あい集ってこの碑を建立し音楽と花を捧げ深い哀悼を世に伝えるものである。

弥生門側の碑には、

東京大学医学部戦没同窓生の碑 昭和六年（一九三二）から昭和二〇年（一九四五）まで十五年にわたる戦争（満州事変、日中戦争、太平洋戦争）で東京大学医学部は同窓生の中から二〇〇人を越える多数の戦没者を出した。彼らの多くはアリユーション列島アッツ島からニューギニア、ガダルカナル島、中国、東南アジア、沖縄に拡がった戦火の中で、また広島・長崎で医療従事中に原子爆弾の劫火に斃れた。私たち医学部卒業生有志はこの事実を悲しみ、これを後世に伝えるべく、基金を組織して戦没者と戦没地の調査を行い、同窓会鉄門俱樂部に医学部構内への追悼碑建設を提案した。同俱樂部はこの事業の実行を決議して医学部教授会の承認を求めたが、未だその採決に至らず、いまや戦没世代同

窓生は碑の完成を見ることなく世を去ろうとしている。この「東京大学医学部戦没同窓生の碑」は、戦後最初の総長南原繁先生の戦没学徒追悼の志を承け、この地にお住いの鹿野家の皆様から温かいお心をいただいて建立するに至ったのであって、避けがたい状況下に、愛する人々のために一命を捧げた若者たちのいたましくも悲しい事実を歴史に刻む碑である。私たちは戦没同窓生への思いを戦いに斃れた友を担って母校に帰る来る学友の群像に託し、近い将来同窓会鉄門倶楽部の決議が実行され、この碑が医学部構内に移築されることを期している。新世紀最初の東京大学五月祭の今日、ここに同志あい集ってこの碑を建立し、音楽と花を捧げて深い哀悼を世に伝える。

慶應義塾でも昭和三十三年、創立百周年に際会したとき、卒業生有志が建立を企て、彫刻家朝倉文夫に青年の彫像制作を依頼し「平和来るの像」を建てた。小泉信三塾長はそこに「丘の上に平和なる日々に征きて還らぬ人々を思ふ」と記したが、学内には建立に批判的な意見を持つ方々が多くいて、「出征」「戦死」「戦う」という戦争にまつわる言葉を用いることができなかったという。その風潮は平成十年十一月七日に建てた「還らざる

学友の碑」の際にもあり、鳥居泰彦塾長は言葉を選びえらびして、ようやく「還らざる友よ 君の志は われらが胸に生き 君の足音は われらが学び舎に響き続けている」と綴り、台座には、「還らざる学友の碑 この碑は今次大戦において志半ばにして逝った学友を偲び慶應義塾が建立する」と刻んだ。「これが精一杯の文面だった」と、平成十五年度國學院大學院友大会記念講演会（誇り高き大学―歴史と未来）で語っている。

これに対して皇學館の場合、終戦六十周年を迎えた折、多くの賛同を得て法人が学内に建立した。「建碑由来記」には、

大東亜戦争熾烈を極めた 昭和十八年十月 文科系学徒の徴兵猶予停止が発令され 神宮皇學館大學からも 在学生の四割を超える 一五一名の学生が勇躍出征した 山田孝雄学長は 学業半に国難に殉ぜんとする 学生のため この場所にあった講堂に於いて 壮行送別会を催し 最後の講義をせんとて 養老令神祇官の条につき 特別講義を行われた 講堂寂として声なく 万感胸に迫ったと伝えられる 出陣学生は 戦局を回復すべく各所に奮闘したが 終に列挙する二二名が 尊い生命を祖国に捧げられた 本年終戦六十周年に当り 国の礎となつて 平和繁栄の基を築かれた その

戦没学生の決死の功績を 永く後世に伝えて顕彰せん
がため 国際的彫刻家流政之氏の手になる この碑を
建立するものである

平成十八年二月十一日

また東洋大学の場合も校友会によって円満に進められ
大学に寄贈された。白山キャンパス「甫水の森」の中ほ
どに建つ真新しい庵治（あじ）石に刻まれた「平和祈念
之碑」には、

第二次世界大戦下において 学徒出陣により学業半ば
にして戦場に赴き戦死した学友をはじめ 過去の大战
で戦没された校友は多数に上る 我々はこれらの方々
に深く哀悼の意をささげるとともに 戦争の事実を真
摯に受け止め アジアの人々との真の共生を目指し
世界の平和を祈念するため 戦後六〇年に当たる本年
校友会創立一一〇周年記念事業の一つとして この碑
を建立する 二〇〇五年十一月吉日 東洋大学校友会
とそれぞれ刻まれている。

*

國學院大學の慰霊碑は戦後二十三年を経ての建立で
あった。他大学に比べて早い方であるが、もっと早くす
べきではなかったかという思いもないわけではない。だ

が、國學院大學の場合は毎年十一月四日の創立記念日に、
物故者慰霊祭を行い、創立以来の本学に関わった方々す
べての御霊をひもろぎに招き慰霊を行ってきたことを考
えれば、櫛と碑の違いこそあれ、永年、慰霊してきたこ
とになる。これは誇れる行為ではないだろうか。戦場で
亡くなった方、病気で亡くなった方、死に方にはいろい
ろとあるが、それを問わず、分け隔てなく御霊安かれと
祈る。この死して皆平等の精神こそ神道の神髄であり、
われわれ日本人が古来継承してきた真の心ではないだろ
うか。

日米和親条約（安政元年）の締結を契機に欧米列強と
交わるようになって一五三年。日本は戦争という、大き
な犠牲を幾度も払いながらも無我夢中で時代を駆け抜
け、今日の素晴らしい社会を築き上げてきた。先人の犠牲
と努力があつての今であることを決して忘れてはならな
い。ここに紹介した慰霊碑の幾つかに頭を垂れながら、
これからも先人の方々の御霊に感謝の誠を捧げてゆきた
いと思った。

（國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセン
ター客員教授）